批評・紹介

小濱正子著
近代上海の公共性と國家

吉澤誠一郎

小濱正子氏は、日本を代表する上海史研究者のひとりとして上海においてもよく知られている。その最初の單著である。

中國都市史研究は、中國の各都市だけでなく、アメリカ合衆國を中心とする歐米においても急速な進展を見せており、膨大な研究業績が發表されてきた。この現狀は、評者（吉澤）が、小濱氏などの先學に學びつつ中國近代都市の歷史を勉強しはじめたころの感じからすると、意外というほかない隆盛である。本書の刊行は、そのような動向のなかで、日本での研究水準を示すという責務を負っていると言えよう。はじめに結論を述べれば、本書は、丁寧な史料分析と着實な論の運びによって、その責務をきちんと果たしたと評價できる。

本書は、お茶の水女子大學から學位を得た博士論文に基づいている。既に雜誌等に公刊され廣く知られた論考の內容も含まれているが、書き下ろし部分も十分な檢討に値する問題提起に滿ちている。

さっそく、內容を紹介してゆきたい。

まず、序章「問題設定と本書の視角」では、上海社會を考察する軸となる「社團」の概念と公共性への注目という視角が說明される。

「社團」とは「後期帝政期から近代の中國における、成員のなんらかの自發的意圖的な結集によって形成された社會團體」（六頁）であり、具體的には、會館・公所や民間慈善團體、民間消防團體、商會、工會などを指す。そもそも社團とは、成員間のなんらかの共通性の認識を基盤として形成されるものであり、そこには仲間意識に支えられた共同性が存在する（八頁）。このような社團のリーダーとなるような人々を本書では地域エリートと呼ぶ（七頁）。

地域における共同性の認識の成立を、社團を軸に考えてみる場合、地域全體の共同性に立脚した團體の登場が劃期をなすであろう（九頁）。このような地域社會全體の共同性は、もはや全體性・普遍性・公開性などを志向する價値觀を含んだ「公共性」と呼びうるものである（九頁）。「地域社會には、それを維持してゆくためになんらかの形で遂行されることが必要な諸機能が存在する。たとえばそれは、敎育、經濟秩序の設定と維持、地域防衛、治安維持、社會的弱者の救濟、水利、道路・橋梁などの建設・維持、消防といったことがらである。本書はそれを地域社會の公共的機能と呼び、それが行なわれるような場を「公」領域と呼ぼう」（一〇～一一頁）。

このような關心から、「地方公益」という理念に着目して、その具體相を探ること（第二部）、そして、社團のネットワークがいかに國民統合の基盤とされてゆくかという過程を明らかにすること（第三部）という課題が導き出されるのである。

第一部「社團ネットワークとしての上海都市〈社會〉」の第一章「都市〈社會〉の形成」では清末から民國前期に至る上海の歷史を

概觀しながら、問題提起を行なう。この時期の上海では、自發的な結社である社團が叢生したが、急速に巨大化する近代都市の名種サービスのうち、かなりの部分は各種の社團によって遂行された。そして複數の社團に屬する個人を媒介として、社團間の關係やネットワークが形成されており、このような社團ネットワークの發展こそが、都市〈社會〉を形成したのである。この過程でナショナリズムが大きな役割を果たしている。

第二部「「公」領域の展開——民間社團の擔う公共性」では、慈善事業と救火會についての詳細な分析がなされる。第二章「慈善事業」。いうまでもなく明末以降の「善擧」への着目は、夫馬進氏の研究を端緒とするが、[1] 小濱氏は、それをうけつつ、民國時期の慈善事業の様態を明らかにしようとする。

民國期の上海では、社會的弱者の救濟などをめざす慈善事業は、基本的に民間社團が擔當し、廣く「地方公益」に役立つものと認識されていた。慈善事業は民間資金によって支えられていたが、各層の住民から寄付が寄せられていることからして人々の公共事業への參畫意識が根づいていたことが知られる。その内容は、從來の善擧の體系を改變し、地方自治の一環としての社會事業をめざす方向も含んでいた。

一九二七年、二〇餘の慈善團體が集まって上海慈善團體聯合會が組織され、以後、上海慈善界のネットワークの核となった。國民革命の後の上海市政府が慈善事業への關與を強める中で、慈善界内部の連帶も強化されていった。

第三章「救火會」。上海華界の消防を擔當した救火會という社團の具體像に迫ろうとする。上海南市では消防はもともと善堂の活動の一環であったが、光緒年間に專門の民間組織として救火會が設立されていった。二〇世紀に入り、地方自治の制度化が進むなか、多くの救火會の連合組織として上海救火聯合會が設立された。救火會の活動がになう「地方公益」の理念は、地域エリートをはじめとする南市の各層の人々や地方政府によって支持されていた。

上海救火聯合會は、廣く商人層などからの寄付を獲得し、また（以前から公的性格を持っていた土地など）不動産の所管を認可されることで、財政的基盤としていた。實際に消火にあたる救火會の會員は、各種の商業關係の仕事についている者であった。

國民革命の後、上海華界の消防は上海市政府公安局の管轄下におかれ、積極的な指導・監督を受けるようになってゆく。

附篇「上海共同租界中國人參政運動について」。上海の共同租界において、納税者である中國人住民が、費用負擔にみあう受益と參政權を求めて展開した運動を分析する。このような要求は、五・四運動や五・三〇運動といった機會をとらえ、また財源確保のための增税に反對するという形をとりながら、ますます力をもってゆき、工部局參事會に中國人を含めるなどの成果を得ることができた。

第三部は「黨—國家の下の上海——都市社會の再編」と題され、國家によって社團が再編・解體されていった過程を扱う。第四章「南京國民政府下における社團の再編」では、商人團體と工會の變遷を詳しく分析する。上海の商人團體としては、ブルジョア上層を中心とした總商會と中小商人を結集した商總聯會とがあったが、國民革命の激動のなかで、商人團體再編の試行錯誤が進んだ。南京政府の斷固とした政策によって、上海市商會のもとに工商同業公會が統轄されるような系統が作られた。これにより、中小・零細經營を

含む廣範な商工業者が、南京政府の支持基盤として統合されたと言える。

次に工會であるが、工場勞働者だけでなく、分散的な勞働環境にある徒弟などの組織化にも目をくばる必要がある。南京政府は、工場勞働者の工會を勞使協調路線によって再編していった。これにより、政府は、階級的對峙を否定しつつも、勞働運動を容認し、產業發展のための勞働者の結集という意義を強調していった。國民革命が高揚した時期に店員層も工會に組織されていったが、この動きを南京政府は許さず、雇用者とともに工商同業公會に統合しようと努めた。

こうして工商同業公會・工會がそれぞれ利益代表として政府に働きかける機能を擔うような體制が形成されていった。

終章では、日本軍政下の傀儡政權、そのあとの國民黨の統治、そして中華人民共和國建國後の時期に、國家による社團の統制が強化されてゆき、都市の公共的機能がほぼ全面的に行政に渡されていったことが指摘される。

以上、本書の豐富な內容の概略を示してみた。まず指摘すべき本書の特長として、上海で活動したいくつかの種類の社團について、實に詳細な具體像を提示した點を擧げるべきだろう。なかでも、數量的な情報の整理をふまえて、單なる印象論をこえた說得的な議論を展開していることを特筆したい。隨所に數字を示した表が挿入されているが、これらを作成した作業量は本書の成功にとって大きな貢獻をなしたと言えよう。

また、民國前半期の上海社會を社團ネットワークとして把握する視角は、研究の導線として更なる探求を誘うことだろう。近年、都市の社團に着目した論考は着實に增加しているが[2]、それらが、社會をどのように組み立てているかという說明は、餘りなされていない。小濱氏の提示する模式は、一定の地域の社團が、複數の社團を指導する地域エリートを通じてつなぎあわされて、地域社會の實體を形成するというものである。その歷史的展開も含めて、さまざまな議論を引き起こしうる示唆的なものと言えよう[3]。

本書の眼目をなすのは、公共性という概念の提示とそれにもとづく具體像の描寫である。論者によって「公共性」の意味內容が大きく異なるので確認しておきたいが[4]、評者の判斷によれば、小濱氏の「公共性」は、（a）「異なる立場・意見の併存を前提とする討論の場」というような意味ではなく、むしろ（b）「社會を一丸とする共同意識・一體感を前提とし社會全體の利益をはかろうとする理念」である。小濱氏は、このような相違を明示していないが、アイデンティティの共有といった要素を重視する小濱氏の議論からして（a）ではなく（b）であることは明らかと思われる（小濱氏が公共性と結びつける「公開性」も共同性の輪を廣げてゆこうとする志向と解釋されるので、異質な價値觀の共存を強調する理念ではない）。日本語には確かに小濱氏のような「公共」概念が存在するので小濱氏の用語も當然正當と言える。一例を擧げれば、日本國憲法第一二條に「この憲法が國民に保證する自由及び權利は、國民の不斷の努力によって、これを保持しなければならない。又、國民は、これを濫用してはならないのであって、常に公共の福祉のためにこれを利用する責任を負ふ」とある。いうまでもなくこの「公共」は（a）の意味では理解できず、「地域社會全體の維持發展を考慮す

るような意識」（小濱氏著書九頁）に通じるものと言えよう。このような「全體」主義的な理想が小濱氏の公共性概念の核心にあり、おそらく「公」という中國語の語義にも忠實なものと思われる。

公共性を重んじた市民の自發性への着目と共感は本書を一貫している。確かに、そのように社會のために自ら盡力する人々の存在が、特に民國前期の上海社會を支えていたことは、本書でみごとに示されている。

ここで、評者の念頭にのぼる唯一の疑問は、そのようなボランティアを奉仕活動への動員とどのように區別したらよいのだろうか、というものである。[5]

小濱氏が指摘する興味ぶかい事例として、消防活動で殉職した者の顯彰がある（一六八～一六九頁）。これは、模範的な行爲を華々しく稱えることで事業への自發的な參加を誘うという政策意圖に支えられたものと解釋することができる。また、「救火會は、チャンスを求めて上海へやって來た、豊かでない普通の青年が、日常的な仕事や居住地區の絆を基盤に活動する中から、社會の公益に參畫する上海社會の一員として認められてゆくための、重要な手がかりとなっていた」（一六九頁）という説明がなされている。これに首肯しつつ評者が讀み替えると、上海社會の一員として認められるためには、（火事場での危險をともなう）奉仕活動に參加しなければならなかったということになろう。また、小濱氏が丹念に實證されたように、上海の下層民を構成しがちであった蘇北の出身者は、救火會に參如する機會が狹かった（一七八～一七九頁）ということも、奉仕活動が特權的なものになるという逆説的傾向を強めていたと思われる。もちろん、消防活動への熱意・自發性や殉職に對する熱狂的な賞贊という心情そのものは當然あったと考えたいが、小濱氏のいう公共性とは、まさにそのような奉仕を要請する價値觀に裏づけられていたということこそ、評者としては注視したい點なのである。小濱氏のいうところの、「內向きの共同性を越えた」地域社會の共同性（九頁）は、まさに、廣範な人々を奉仕活動に動員する理念であり、それが近代上海の公共事業を支えていたと理解できる。

およそ社會とは、人間のそのような公共性への參加意欲によって支えられているということは、疑いないところである。中國語で「義務勞働」といえば、それはボランティア活動（勤勞奉仕）の意味だろう。義務がすなわち自發的なものとなるのは、社會を能動的に支えることが社會人としての務めと考えられた場合である。ここに見える眞實と欺瞞からは、近代上海の人々と同樣に、現代の我々も逃れることはできない。公共性の問題に評者が關心をもつのは、まさにこの點なのである。

それゆえ、公共性が、國民黨ついで共產黨の統治のもとに抑壓されていったという小濱氏の示唆に、評者は啓發されながらも、やや疑念を感じるのである。「公共性」に盡くすという理念と組織形態は、その公共の福祉の內實を入れ替えれば容易に國家建設や抗日運動そして社會主義改造に服務するという形になりうる。小濱氏のいう國家と社會の「混淆しやすさ」からしても、そのように考えることは正當だろう。思えば、共產黨の統治も、人民の自發的な運動という形をとりながら構築されていったのである。

かつて溝口雄三氏は、歷史的に展開してきた「公」の理念が中國社會主義の前提となったという指摘をされ、それは主に經濟思想に重點をおいた議論であった。[6] これを想起した評者にとっては、（以

下は溝口氏御自身の本意ではないかもしれないが)、小濱氏の指摘されたような公共性が、實は社會主義體制と一定の親和性をもっていたとすら思える。だから「近代上海の公共性はなぜ、繼承されなかったのか」(三二九頁)という小濱氏の問いを評者は共有しないのである。(7)

しかし、以上のような公共性に着目しようとする小濱氏の試みから目が離せないのは、やはり理由がある。本書でみごとに描寫されたような公共性は、近代中國の人々の現實感覺と理想意識との賜である。すなわち、當時の人々も、萬一ひたすら自己の利益のために自己主張する人間ばかりでは世の中が立ちゆかないという事實への洞察をもち、そのような個別的利害と全體的福祉の間で平衡をとろうとしていたことは疑いない。「滅私奉公」「人民の爲に服務する」式の公共性の高唱は危險をはらんでいるが、(8)單に「自私自利」を追求する利己主義ばかりでは困る。これは政治思想史の古典的な問題と言えようが、民國時期の上海の人々は實踐的にこの問いを解こうとしていたと考えたい。

さて、もうひとつ小濱氏の議論でわかりにくいのは、公共性と國家の關係である。「地域社會における公共性」(一〇頁)という表現に示されるように、小濱氏の關心は、地域社會のための「民間」公益事業に公共性を見いだすことにある。まさに第二部が「「公」領域の展開——民間社團の擔う公共性」と題されることに、小濱氏の視角が的確に表現されていると思われる。ここでいう「公」領域とは、公共性が顯現する場(一〇頁)であり、「國家と私領域の間にあって、その兩方に屬することが可能であり、兩者を媒介する機能を果たすこともある」(一一頁)。一一頁の圖〇—一に「公」領域の說明として「敎育、社會福祉、治安、インフラ整備など」と記されているように、それは公益事業、公共事業の行われる場と理解できる。ここで理解しにくいのは、國家はあくまでも「公」領域の外側からこれに「浸透」するものとする論理である。「國家と社會の機能的同型性」という指摘を行なう以上、「國家—社會關係」という視角は、あまり意味がないように思われる。國家と社會が別個の實體として存在するような用語法をとりながら、それは機能的に同型であり、しかも相互浸透しているともいうのは、說明のしかたとしてはやや混亂があるように思わせる。地域社會と國家が「機能的に同型」というなら、地域社會と國家を異質なものの二項對立とみるような論理構成をとるべきではない。「國家と社會が限りなく混淆してゆく」(一三頁)というなら、概念的に國家と社會を區別する理由は何か。これは、評者も直面する困難な問いなので、敢えて記したい。

小濱氏は、社團の發展とナショナリズムの關係をきちんと指摘されているが、それならば社團ネットワークによって形成された地域社會の共同性(アイデンティティの共有)は、さらに廣範な共同性を志向するナショナリズムとどのような關係にあるのか。小濱氏の「公共性」觀によれば、「お國のために盡くす」というのも公共的なことと考えるべきであろう。「國のために」は公共的でなく「地域社會のために」は公共的であるとする根據はあるまい。「愛國」理念を犧牲にして「地方公益」を守ろうと主張した事例はなさそうである。(9)

もちろん、身近な地域社會への服務をめざす公共性が、「民主主義の學校」の役割を果たすという視角もある。しかし、それが「お

國のため」に轉轍（または直進？）しないための條件とは何だろうか。小濱氏の公共性論から痛切に感じる疑念は、まさにこの點である。國家と社會は區別されるべき別個の異質な實體なのか、それとも「機能的に同型」なのかと敢えて問う評者の意圖は、そのようなものである。

以上のような困難は、小濱氏だけでなく、評者も含め多くの論者がぶつかっているものであると感じる。地方自治と地域エリート研究が、さまざまな形で行なわれながらも、[10] いまだ突破できていない問題なのである。これらをどう總括・超克するか。本書刊行にひきつづき小濱氏はじめ皆で議論してゆきたい。

以上やや抽象論に傾いたが、次にいくつかの論點を簡單に示すことにする。これらは、小濱氏の大著を讀みつつ、今後、自分なりに考えてみたいと思った點である。

・都市の共同性

社團ネットワーク論は、上海という都市を一丸としたアイデンティティの存在を強調する議論と、どのような關係にあるのだろうか。よく知られているように、近代上海社會は、各地からの人口流入によって形成されたが、たとえば寧波人がその牛耳をとり、蘇北人が下層におとしめられており、出身地によって明確な差別意識が再生産されていた。都市自治と市民意識というテーマは古くて新しい問題であろうが、上海において各種各樣の社團に結集してこそ生活が成り立つという狀況に鑑みれば、どれほど「上海人」なる集合意識が實感として共有されていたか、甚だ疑わしいとすら評者には感じられる。「地方公益」は、當然そのような上海の一體性という理念の存在を示唆するものであろう。とはいえ、蘇北人に對する嚴しい疎外の實態を念頭におき、慈善團體すら出身地の絆によるものがあったことに注目すれば、[11] むしろ、差別意識がますます強化され、ばらばらに分裂してゆく社會像すら描くことが可能である。この狀況が年代をおって克服され上海市民としての一體感が強まっていったという實證的根據は今だ見いだされないように思われる。

・租界論

租界が、中國近代史にもった意義はやはり大きい。近年、租界の外國人社會に對する關心が高まっているが、[12] 小濱氏が本書で論證された中國人參政運動に示されるような政治制度の問題、また領事裁判權に示される司法の問題などに見られる中國人と外國人のかかわりの具體相は、さらに檢討されるべきである。

これと關連して、租界行政における公共性とはいかなる性格をもっていたのかという點は興味を引かれる。上海をコスモポリタニズム（cosmopolitanism）の特色で把握する認識と、小濱氏のナショナリズム論とはどのような關係にあるのか。外國人のもつ條約特權や租界の特殊な法的性格は、中國人と外國人の關係を規定する大きな要因であり、そのもとで經濟的な相互依存のような共生の狀態が生まれていた。[13] このような場において公共性をいかに論じるべきなのだろうか。反帝愛國の理念によって「買辦」「漢奸」などと批判される中國人は、公共性から顏をそむけていたのだろうか。これも上海史の文脈で、公共性と國家を論じようとするとき起こってくる疑問である。

なお、小濱氏の議論に補足すると、上海公共租界における中國人參政運動の過程で、それを正當化するための議論として提示された

一論據は、「天津租界ではとっくに華董一名があり、すでに八年にもなるが、いまだ華董が私的で放縱な振る舞いに及んだことはない」（『申報』一九二〇年四月八日）という點であった。[14] これは、一九一二年以降、天津英租界擴大區域において、華董一名が選ばれていたことを指すが（一九一八年に兩區域は合併）、おそらく國民革命時期の租界回收の動きをふまえて、一九三〇年代には天津英租界の董事會で華董は半數を占めていた。[15] このように、各地の租界の動向が、相互に參照される點も注目に値する。

・日常性——職場と近鄰關係

人々の日常生活は、小濱氏の用語法では「私領域」ということになるかも知れないが、これと社團ネットワークとの關わりをどのように說明するか、また實證的に探求するかという問題がある。都市の下層民が日常的な職業と居住の場で形づくる共同性を何らかの形で想定することは可能であろう。特に、近鄰關係をどのように考えるかが一つの要點となるかも知れない。中間層ないしホワイトカラーの場合には、職場をどのような秩序の場と考えるかも大切な論點であろう。そこは、「公司」という營利の場だが、ある種の共同性と階層性の場でもある。[16]

・社團の歷史的變遷

小濱氏は、「傳統中國の社會團體と、近代のあるいは近代的なそれとを截然と分けて考えることは難しい」（二四頁）として、「舊式社團」と「新式社團」の概念的區別を行なうことに餘り意義を認めていない。確かに、論者によっては、このような區別をかなり圖式的に行なってしまい、當然に想定される連續性を切り捨て單純すぎると評者も感じる。また、民國前期は、そのような新・舊の社團が混在している時代であろう。とはいえ、例えば商會の登場に着目する中國の學者の視點には、そこに何らかの「新しさ」を見いだせるという歷史的關心が含まれているはずだ。おそらく、當時の人々も、この社團は「新しい」、その社團は「古い」などという感覺を持っていたのではないだろうか。例えば、會館・公所において重んじられていた職業神の崇拜は、二〇世紀初頭に現れる商會には無緣である。會館・公所を「封建」的（ふるめかしい）とする意識は、十分な關心の對象とする價値があろう。[17]

以上、あたかも高みに立って小濱氏の大著を評するような印象を與える論評になってしまったかもしれないが、實のところ、それも小濱氏の著作があってはじめて獲得できた地步に他ならない。まさに後進の利點と言える。そのことに改めて謝意を表することで拙評の結びとしたい。

註

（1）夫馬進『中國善會善堂史研究』（同朋舍出版、一九九七年）。夫馬氏著書に對する小濱正子氏の見解は「最近の中國善堂史研究について」（『歷史學研究』七二一號、一九九九年）參照。また、同書の書評としては、斯波義信氏のもの（『東洋史研究』五七卷二號、一九九八年）と吉澤のもの（『社會經濟史學』六四卷二號、一九九八年）もある。

（2）Vincent Goossaert, “Matériaux et recherches nouvelles sur les corporations chinoises urbaines traditionnelles,” *Revue bibliographique de Sinologie*, nouvelle série, Vol. 17 (1999).

（3）評者の印象によれば、中國共產黨の統治、つまり、各々の單位に黨支部をおいて、黨員と單位成員という兩屬性をもつ者によって多くの團體を統合してゆく手法も、（團體そのものの組織力は異なるにせよ）、同じ原理であるように思われる。

（4）「公共性」の概念設定は各種各樣ありうるが、ここでは當然ながら小濱氏の概念規定を尊重して議論を進める。「共通のアイデンティティ」に基づく「公共性」概念に否定的な立場の著作としては、例えば以下がある。齋藤純一『公共性』（岩波書店、二〇〇〇年）。東島誠『公共圈の歷史的創造—江湖の思想へ』（東京大學出版會、二〇〇〇年）。「公」觀念に對する評者の考えは、不十分ながら、拙稿「電車と公憤—辛亥革命前夜天津の市內交通をめぐる政治」（『史學雜誌』一〇五編二號、一九九六年）で示した。最近では、次の論文も小濱氏とやや異なる「公共」理念について論じている。Bryna Goodman, "Being Public: The Politics of Representation in 1918 Shanghai," *Harvard Journal of Asiatic Studies*, Vol. 60, No. 1 (2000).

（5）この點では、以下における理論的檢討より示唆をうけた（具體的には異なる狀況を論評しているが）。中野敏夫「ボランティア動員型市民社會論の陷穽」（『現代思想』二七卷五號、一九九九年）。澁谷望〈參加〉への封じ込め」（同前）。

（6）溝口雄三「中國における公・私概念の展開」（『思想』六六九號、一九八〇年。同『中國の公と私』研文出版、一九九五年に再錄）。

（7）これは、社團の發揮する公共性は、共產黨が體現しようとする公共性にとっても容易にわがものとして統合しうる性格をもっていたかもしれないという趣旨である。社會主義革命の必然性を前提とする議論でなく、共產黨の勝利の理由を說明する意圖もない（社會主義政權形成の理由は、まずは一九四〇年代の政治過程から解析されるべきである）。

（8）社會ないし國家の利益を第一とする公共觀念に抵抗する思想は、自由主義である。ジョン・スチュアート・ミル John Stuart Mill は、社會に抗する個人の自由（個人の多樣な生き方）を擁護しようとしていたが、ミルを翻譯した嚴復は、その點を理解できなかった。ベンジャミン・シュウォルツ Benjamin I. Schwartz（平野健一郎譯）『中國の近代化と知識人—嚴復と西洋』（東京大學出版會、一九七八年）第六章。南京政府時期になり、胡適などにより「人權」「民權」が語られるようになるが、これは黨國と對峙する自由主義的な主張と言える。

（9）地域の利益と中國の利益との關わりがどのようなものとして意識されていたかは、まだ議論されはじめたばかりの問題と言えよう。土屋洋「清末山西における鑛山利權回收運動と青年知識層」（『名古屋大學東洋史研究報告』二四號、二〇〇〇年）。拙稿「ナショナリズムの誕生」（濱下武志・川北稔編『支配の地域史』山川出版社、二〇〇〇年）。

（10）李達嘉「上海商人的政治意識和政治參與（一九〇五—一九一一）」（『中央研究院近代史研究所集刊』二二期上、一九九三年）。田中比呂志「清末民初における地方政治構造とその變化—江蘇省寶山縣における地方エリートの活動」（『史學雜誌』一

○四編三號、一九九五年)。佐藤仁史「清末・民國初期における一在地有力者と地方政治—上海縣の《鄉土史料》に即して」(『東洋學報』八〇卷二號、一九九八年)。稻田清一「清末、江南における「地方公事」と鎭董」(『甲南大學紀要』文學編一〇九、一九九九年)。

(11) Emily Honig, *Creating Chinese Ethnicity: Subei People in Shanghai, 1850-1980* (Yale University Press, 1992). 帆刈浩之「近代上海における遺體處理問題と四明公所—同鄉ギルドと中國の都市化」(『史學雜誌』一〇三編二號、一九九四年)。虞和平「清末以後城市同鄉組織形態的現代化—以寧波旅滬鄉組織爲中心」(『中國經濟史研究』一九九八年三期)。

(12) 桂川光正「上海の日本人社會」(『國際都市上海』産研叢書一、大阪産業大學産業研究所、一九九五年)。高綱博文・陳祖恩主編『日本僑民在上海』(上海辭書出版社、二〇〇〇年)。Robert Bickers, *Britain in China* (Manchester University Press, 1999).

(13) 佐々波智子「戰前期、上海租界地區に於ける不動産取引と都市發展」(『社會經濟史學』六二卷六號、一九九七年)。本野英一「訴訟問題からみた清末民初の中英經濟關係」(『歷史評論』六〇四號、二〇〇〇年)。

(14) このことは、次の論文によって知った。陳三井「上海租界華人的參政運動—華董産生及增設之奮鬪過程」(中央研究院近代史研究所編『近代中國區域史研討會論文集』中央研究院近代史研究所、一九八六年。また以下に再錄。陳三井『近代中國變局下的上海』東大圖書公司、一九九六年)。

(15) 尙克強・劉海岩主編『天津租界社會研究』(天津人民出版社、一九九六年)一一七～一一八頁。

(16) Wen-hsin Yeh, "Corporate Space, Communal Time: Everyday Life in Shanghai's Bank of China," *American Historical Review*, Vol. 100, No. 1 (1995). Hanchao Lu, *Beyond the Neon Lights: Everyday Shanghai in the Early Twentieth Century* (University of California Press, 1999). 小濱氏は消防活動と近鄰關係の連關について示唆しているが、次の論文にも鋭い指摘がみられる。關文斌 Kwan Man Bun (劉海岩譯)「亂世—天津混混兒與近代中國的城市特性」(『城市史研究』一七・一八輯、二〇〇〇年)。

(17) 會館・公所に「封建迷信」の色彩を見いだした例として、馬敏・朱英『傳統與近代的二重變奏—晚清蘇州商會個案研究』(巴蜀書社、一九九三年)一三〇頁を擧げておく。なお以下で〜二〇世紀初頭の意識變化に注目した。拙稿「清末の都市と風俗—天津史のばあい」(『岩波講座世界歷史〔二〇〕アジアの近代』岩波書店、一九九九年)。

二〇〇〇年二月　東京　研文出版
A5判　三七三頁　八五〇〇圓